

皆様、おはようございます。ザッパ会長、福原会長ご招待ありがとうございました。イタリア宇宙機関が日本の宇宙航空研究開発機構 (JAXA)との宇宙開発部門での協力についてご説明したいと思います。日本は現在非常におもしろい時期でございまして、昨日新しい内閣、首相が誕生したわけですが、宇宙空間におきましてもイタリアと日本の関係が非常に緊密になってきています。現在われわれの活動は11の小官庁が活動しており、宇宙開発にかかわる5年計画が昨年日本で作られました。この中では R&D の活動や宇宙空間の活用・応用といったものを非常に重要視しております。このコンセプトはイタリアでも同じように見直されてきたもので、この宇宙活動を近代化に活用するという考え方です。イタリアにおきましても主に地球観測やコミュニケーションということに活用されていますが、日本もここに關心をもっております。産業に関して非常に重要なことはイタリアにおいての宇宙空間での活動はイタリア宇宙機関に集中しておりますが、防衛相を中心とした様々な省庁とも協力しているということです。衛星回線を通じて国土の安全などにも使われております。日本でも同様に展開しておりまして、軍事利用と民生利用を統合していく可能性もあります。日本はイタリアと似たような部分もありますが、それぞれ独自の歴史を持っております。防衛、安全保障の面ではそれぞれ違っており、新しい概念が出てくるまでに時間はかかりますが、この宇宙開発活動がどのように産業に影響を与えるかというのは重要です。

またそれは国内だけでなく、国際社会にどのように提供できるかということです。イタリア宇宙機関と JAXA は明日ある新しい協定に署名をするのですが、この地球観測のデータといったものをお互いに交換するというものです。これは自然災害管理に役立つものです。この観点でも日本とイタリアは非常に似ておりまして、両国とも地震、洪水、火山などの自然災害が多く発生する国です。例えばラクイラの地震でわれわれが得た教訓ですが、イタリアでは4つ目の衛星が来年打ち上げる予定となっておりますが、地球観測計画の核となる、コスモスカイメヌというのが地球観測のために非常に有効であり、地質変動などの観測にもなっております。ラクイラ地震は5000kmの深海でおこり、周辺の山脈が28mmほど動いたのですが、そういった観測も可能になるわけで将来どのようになるのか予防などにも役立つことができるのです。現在われわれは4~5時間毎に地球観測を行っており、世界のあらゆる場所の写真を見ることが出来ます。継続的に観測することが安全保障のためにも重要です。自然現象の観測には地質、緯度というのを使われます。両国にとって關心がある部門ですが、海域観察などにも活用できるわけです。こうした観測データをどのように応用できるかこの点においてもイタリア・日本は共通の問題を抱えております。ですので、共通のアプリケーションの開発を進めていきたいと思っております。レーザーシステムを進めていますが、アルゼンチン、ヨーロッパその他の国と様々な技術を使って行っています。日本の場合は非常に細かい自然観察、あるいは工学衛星を考えておりますので、お互いのニーズにあった協力関係を作っていくことが非常に重要です。こうしたデータをどのように商業的に活用していくかということは、イタリアの方が進んでいるように思われます。つまり、データを販売し、得た資金をさらに投資するということは日本ではあまり行われていないようです。シックプランという新しいプランを現在考えておりますが、日本ではそれに対する批判もあってインフラが十分に活用されていませ

ん。また、日本の R&D のレベルは非常に素晴らしいものがあります。イタリアはデータの活用というものを非常に重要視しており、日本の今後は非常に興味深いものがあります。また、酸素メタンを使った次世代のランチャー（打ち上げ機械）のエンジン開発などの協力関係も考えられております。また宇宙開発につきましてはコスト、どのような素材を使うかですが、1キロの衛星を乗せるためにはだいたい5万ドルかかります。非常に高いコストがかかるわけですから、打ち上げシステムというのもそういった意味で非常に重要な位置を占めておりまして、この打ち上げ開発につきましてイタリア・日本の協力関係を進めているわけです。

最後にもう一つ申し上げたいのは日本とイタリアで共通認識があることはお互いの国の宇宙開発計画において国との外交政策にとっても非常に重要であるということです。この2国の国際システム、もちろん2国とも国連の参加国でまた国際衛星にも参加しておりますので、宇宙空間の平和利用、安全の保障というものが非常に重要であるということ、またそれがなければ世界的な外交政策もスムーズに進めることが出来ないこととなります。イタリア、日本の2国でこういった協力関係を続けていきたいと思っております。